

国循・天理よろづ印 症例とエコー×イラストで学ぶ 成人先天性心疾患[Web 動画付]

泉 知里(編)

筑波大教授・循環器内科/日本成人先天性心疾患学会代表理事

石津智子

循環器内科医が当たり前のように ACHD を 診療できるように

『国循・天理よろづ印 症例とエコー×イラストで学ぶ成人先天性心疾患』は、若手循環器内科医にこそぜひ読んでほしい、いや、できれば必修にしたい一冊である。

本書の魅力は、成人先天性心疾患(ACHD)という一見ハードルの高い領域を、「まずどう診るか」「エコーで何を考えるか」という極めて基本的で本質的な視点から、丁寧に、そして親しみやすく示してくれる点にある。まず強調したいのは、本書が一貫して大切にしている“順番”だ。

患者さんを丁寧に診察すること。

心エコーを誰かに任せるのではなく、自分で当ててみること。

そして、得られた所見をどう解釈し、CTやMRIなど他の画像診断とどう頭の中で融合させていくか。

この循環器診療の王道ともいえるプロセスが、症例を通じて自然と身につく構成になっている。ACHD 診療というと、複雑な解剖や専門用語に目が行きがちだが、本書はそこに過度に踏み込まない。細部にこだわり過ぎず、まずは大局から基本を学ぶ。その姿勢が全編を通して貫かれており、「まずここを押さえればいい」という安心感がある。だからこそ、ACHD を専門としない循環器内科医や、これから心エコーを本格的に学びたい研修医にも、すっと入ってくる。また、本書を読んでいて思わずうなずいてしまうのが、研修医、検査技師、指導医とのやりとりだ。

「この PDA の患者さん、全然右室が大きくないですね」

「右室？ PDA って右室が大きくなる病気だった？」

——まさに“先天性心疾患の心エコー室あるある”。

どこかで見たことのある、あるいは自分自身が経験してきた現場の空気感が、そのままページに落とし込まれている。気取らず、説教臭くなく、それでいて学びがある。この距離感がとても心地よい。編集を手がけた国立循環器病研究センターの泉知里先生をはじめ、執筆陣が日常診療の中で実際に悩み、考え、工夫してきた経験が、そのまま言葉と図に反映されているのだろう。エコー画像とイラストの組み合わせも秀逸で、「なぜこの所見が出るのか」「この形は何を意味しているのか」が、視覚的にも理解しやすい。心エコーは単なる検査ではなく、診療を前に進めるための“共通言語”である。本書は、その言語をどう身につけ、どう使いこなすかを、肩の力を抜いて教えてくれる一冊だ。先天性心疾患は心エコー室でも、最も苦手とされ、敬遠されがちな領域である。しかし成人患者数はすでに 50 万人規模に達しており、「小児科の病気」と言われていられる時代ではない。本書を読み進めるうちに、「循環器内科医が、さりげなく、当たり前のように ACHD 患者さんを診療できるようになってほしい」という泉先生はじめ執筆者の皆さんからの温かなエールを感じるだろう。

若手医師には最初の一步として、指導医には「まずこれを読んでみよう」と勧める本として。

多くの心エコー室の本棚に置いておきたい、実に実践的で温度感のある良書である。



●B5/頁 152/2025 年
定価：7,920 円
(本体 7,200 円＋税 10%)
[ISBN978-4-260-06220-6]
医学書院 刊